

所在地 宮城県加美郡色麻町一の関

立地環境 大崎平野西部、鳴瀬川右岸の標高 30 m
の扇状地

発見遺構 建物基壇、掘立柱建物、竪穴建物など

年代 7 世紀末～10 世紀

遺跡の概要

一の関遺跡は大崎平野の西部、国道 457 号の東側に位置し、鳴瀬川右岸の花川扇状地の末端部に立地する。南西側 600 m には、遺跡で出土する雷文縁複弁四葉蓮華文軒丸瓦などを焼いた土器坂瓦窯跡がある（第 1 図）。

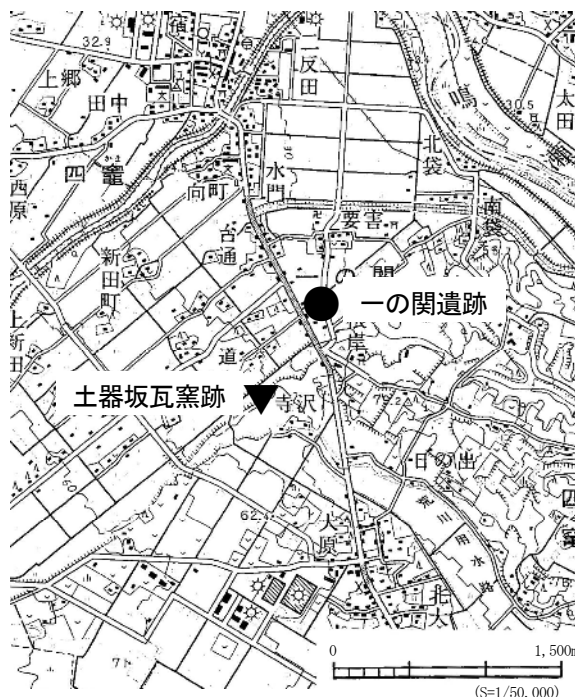
一の関遺跡では、真北方向を基準に造営される建物基壇や掘立柱建物などが発見されている。基壇は乱石積基壇で、規模は東西 14.3 m、南北 11.4 m であり、積土は削平のため認められず 0.8～1.0 m の幅で円礫が数段重なった基底部分のみが発見されている（第 2 図）。なお、昭和 8 年の内藤政恒による踏査では高さ約 90 cm の土壇の存在が認められている。基壇とその周辺から瓦が多量に出土していることから、基壇上の建物は瓦葺であったことがわかる。掘立柱建物は 3 棟以上の存在が認められているが、それぞれの建物の正確な規模は不明である。

出土遺物は発掘資料のほか内藤政恒による採集資料などがあり、瓦、土師器、須恵器、赤焼土器、円面硯がある。軒丸瓦には、雷文縁複弁四葉蓮華文（第 3 図 1）、雷文縁単弁四葉蓮華文、重弁八葉蓮華文（第 3 図 2）、珠文縁素弁蓮華文（第 3 図 3）、鋸歯文縁細弁蓮華文（第 3 図 4）、樹枝文（第 3 図 5）、重圈文（第 3 図 6）、円文、丸十字文、変形複弁花文（第 3 図 7）、素文があり、軒平瓦には手描き二重弧文、交叉唐草文、素文がある。

一の関遺跡は古くは色麻柵跡とされてきたが、基壇化粧、基壇の規模、創建期に葺かれる瓦の状況が寺院の金堂と推定する菜切谷廃寺跡に類似することから、本遺跡の基壇上の建物も寺院の金堂と考えられている（進藤 1990）。寺院の性格については、7 世紀末頃に地方豪族が造営する寺院として創建され、その後、郡衙や城柵の付属寺院として改組されたとする説（桑原 1990）、和銅 6 年（713）前後に建立され、多賀城創建時に改修された郡衙（色麻郡）付属寺院とする説（進藤 1990・2010）、5 期の変遷を考えⅠ期を 8 世紀第 1 四半期の初頭、Ⅱ期を多賀城創建期とし、Ⅰ期からⅡ期への変遷を氏族的性格から色麻柵付属寺院への変化とみる説がある（渡邊 2009）。

関連文献

生田和宏 2019 「一の関遺跡（寺院）」『第 45 回 古代城柵官衙遺跡検討会』資料集
石田茂作監修・原田良雄編 1974 『東北古瓦図録 内藤政恒先生蒐集』雄山閣出版
桑原滋郎 1990 「宮城県内の古代寺院跡について」『中新田町史研究』第 2 号

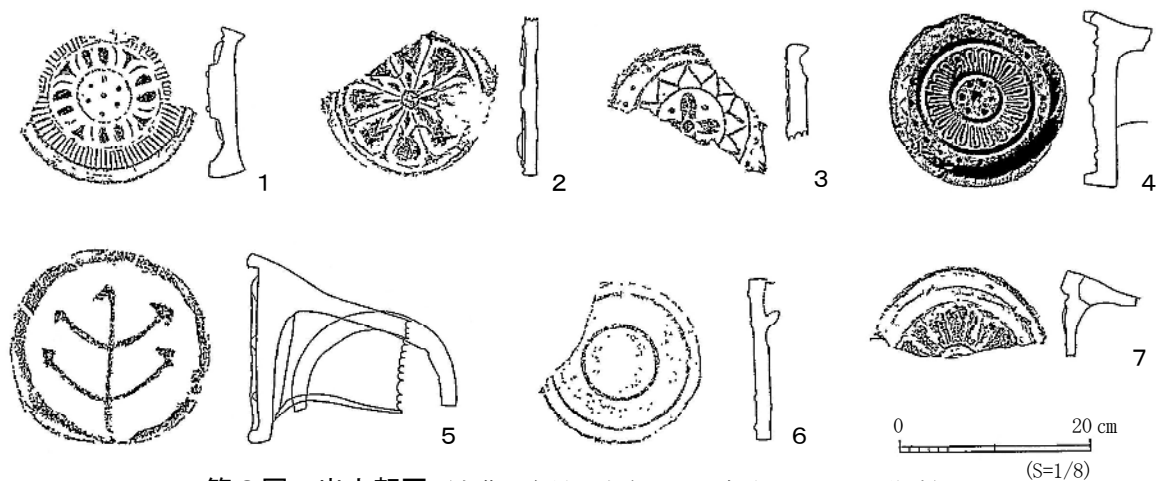


第 1 図 一の関遺跡、土器坂瓦窯跡の位置

- 佐川正敏 2008「東北地方の寺院造営―多賀城創建期以前の寺院―」『天武・持統朝の寺院造営 1―東日本―』帝塚山大学考古学研究所
- 進藤秋輝 1990「多賀城創建以前の律令支配の様相」『考古学古代史論攷』伊東信雄先生追悼論文集刊行会
- 進藤秋輝編 2010『東北の古代遺跡 城柵・官衙と寺院』高志書院
- 内藤政恒瓦資料研究会 2013「宮城県を中心とする内藤政恒瓦資料（2）」『宮城考古学』第15号
- 宮城県教育委員会 1977「一の関遺跡」『宮城県文化財発掘調査略報（昭和51年度分）』宮城県文化財調査報告書第48集
- 渡邊泰伸 2005「宮城県加美郡色麻町 土器坂瓦窯跡の調査」『仙台育英学園高等学校研究紀要』第20号
- 渡邊泰伸 2006「古代東北における古瓦の研究」『仙台育英学園高等学校研究紀要』第21号
- 渡邊泰伸 2009「陸奥国における雷文縁複弁四葉蓮華文軒丸瓦」『古代瓦研究IV』奈良文化財研究所



第2図 建物基壇平面図（宮城県1977）



第3図 出土軒瓦（内藤瓦資料研究会2013、宮城県1977から作成）